

## 『鳥取城』

鳥取市教育委員会 細田 隆博

鳥取城は天文年間に山城が築かれたことに始まります。近世城郭として整備されるのは、天正年間の宮部氏以降です。6万石規模の城でしたが、元和年間に32万石規模の城へと再整備され、幕末に至るまで改修が行われました。今日は、天球丸石垣の解体調査成果を中心にお話します。天球丸は山麓の最高所に位置します。調査によって、埋没石垣が発見され、もともと2～3段の階段状の曲輪が17世紀前半代に1つの曲輪になっていました。この時の拡張の特長は、外郭ラインの石垣をそのまま利用して、その上に新しい石垣を築くという立体的に拡張を行なっている点です。修復される前はこの痕跡が明瞭に見えていました。また、幕末頃までには、大量の土砂による石垣養生などが行われました。

鳥取城は、江戸中期以降も、御殿空間を中心に、新たに敷地が拡張されます。幕末には城内の中枢を通る直線的な広い大手登城路も、三ノ丸拡張によって迂回したようなルート変更が行われています。

## 『高知城』

高知県教育委員会 松田 直則

高知城（大高坂城）は南北朝時代に大高坂氏が築城を開始し、天正年間に長宗我部氏の改修を経て、関ヶ原合戦以降、山内氏によって再構築され、現在見られる高知城の姿となっています。ここでは、本丸南石垣と三ノ丸石垣の解体調査成果を中心にお話しします。本丸南石垣では、天端付近で円弧を描いた石垣面が、解体するにつれて3面の直線的な石垣面で築かれたことが確認できました。また、本丸へ至る黒鉄門は焼失の後再建されますが、天保14年に位置を変える程の大規模な修理が行われたことが調査でわかりました。三ノ丸は、慶長16年二代藩主によって築かれます。それ以前には曲輪がないと理解されていましたが、内部から長宗我部段階の石垣が発見されたことで既に曲輪として機能していたことがわかりました。桐紋瓦も発見され、この長宗我部期石垣の上に建てられた建物に葺かれていたものだと思います。この石垣を常時見て頂く整備を現在行なっています。

近年、高知城では周辺の調査も進んでいます。現在の高知城の搦手部分に近いところからも桐紋瓦が発見されています。長宗我部氏の屋敷も搦手に近いところに想定されており、桐紋瓦は大手門か屋敷の屋根に葺かれたものと考えられ、当時は搦手が大手にあたる可能性も指摘されています。高知城も城主によって大手を変えた城だと言えそうです。

## 『岡山城・津山城』

津山市教育委員会 平岡 正宏

岡山城は、時期差をもつ埋没石垣の代表的な事例です。埋没石垣などの存在から、元々の地形や中世城郭段階から、近世城郭として築城が開始される宇喜多期を経て、岡山池田家成立まで、城の増改築の様子が具体的に分かる城です。城主が代わる度に拡張されています。宇喜多秀家の段階に、自然地形に沿って高石垣が築かれ現在の本丸本段の基本的な姿が整いました。従って平面形は不整形です。この頃の石垣は岩盤直上に築かれています。現在の本丸中ノ段は、池田忠雄が御殿造営のために矩形の縄張りに拡張しました。内部

からは、宇喜多期の石垣が発見され、現在それらを間近に見ることができよう整備が行われています。

津山城は、時期差を持たない埋没石垣の代表的な事例です。森忠政が慶長6年から元和2年まで築城した城で、元和元年の武家諸法度によって、築城が停止されたと言われています。はじめ、埋没石垣など無いだろうと思っていたのですが、忠政一代の築城期間に、本丸の天守台周辺では、現役の石垣内部に少なくとも3回以上の設計変更と思われる埋没石垣が発見されています。

#### パネルディスカッション

司 会 山上雅弘（兵庫県立考古博物館）  
パネラー 中井均・松田直則・平岡正宏・細田隆博  
会場報告 佐伯純也（財団法人 米子市教育文化事業団）  
西尾克己（島根県古代文化センター）  
西尾孝昌（但馬考古学研究会）  
廣瀬岳志（宇和島市教育委員会）

（山上）現在、私たちが目にする近世城郭は、江戸時代の初めに一気に築かれて、そのままの姿で維持されてきたものではありません。段階的に改修を受けた可能性が大きいと思います。これは、どういう背景で起こっているのでしょうか。この点を考えてみたいと思います。既にヒントとして中井先生が御殿について言及されましたが、それぞれの城郭で藩主の御殿はどこにあったのでしょうか。まずこの点から話を進めたいと思います。

（細田）鳥取城は、元和年間の池田光政期に32万石の居城として再整備されますが、江戸時代中頃まで御殿は二ノ丸でした。それが江戸時代中頃以降、三ノ丸に移ります。

（山上）近世城郭というと、藩主は天守のある本丸の御殿に住んで、二ノ丸や三ノ丸は本丸の付属的な施設があったと、多くの人がイメージするのではないのでしょうか。しかし、鳥取城では二ノ丸や三ノ丸の御殿に藩主が住んでいたといえます。それでは本丸はどのように使われていたのでしょうか。

（細田）本丸は久松山（標高263m）の山頂になります。ここには、天守がありましたが、藩主は生活していません。本丸は、天守がある象徴的な空間であったと言えます。

（山上）米子城、高知城はどうでしょうか？

（佐伯）米子城は、戦国時代の終わりに吉川広家が築城を開始し、関ヶ原合戦後の中村氏の段階に完成したと考えられています。その段階に城主がどこに住んでいたのか判然としません。ただ、現状では米子城の本丸に天守以外の大規模な建物があった形跡はありませんので、やはり山麓の二ノ丸や三ノ丸に住んでいたと思います。

（松田）藩主の居住は基本的に二ノ丸の御殿でした。本丸には天守と正殿という建物がありました。これらは高知城の大半が焼失した享保12年の大火後、古相のまま再建しますので、やはり象徴的な役割があったのではないかと考えています。

（山上）ところで、これとは反対に岡山城や津山城では、藩主は本丸に住んでいます。特に岡山城は慶長から元和年間にかけて本丸がどんどん拡張します。それはなぜですか。